

# フォヴェール、ルナル、フォルトウーナ

『狐物語』後継作と『フォヴェール物語』

高名 康文

はじめに

14世紀初頭に成立した『フォヴェール物語』の主人公フォヴェールとは、この世を支配する黄褐色（fauve）の毛色の馬である。物語は二部構成になっている。13世紀後半から、人びとが馬の毛をなでさずる様子が、権力者に対してへつらっている様子として寓意画に描かれるようになった。1310年に書かれた第一部の冒頭は、この寓意画にならって、教会の権力者も、世俗の権力者もみなこの馬にこびへつらうようになり、万物の秩序は逆さまになってしまっていると述べる。フォヴェールの毛色は、黒、赤、白、緑、青のように何らかの美德を表す定まった色ではなく、何色でもない移ろう色としての黄褐色（fauve）であるという。それは、移り気で気の向くことばかりしているフォヴェールにふさわしい色だとする<sup>1</sup>。FAUS（偽りの）とVEL（覆い）からなるFAUVELという名前は、虚偽を隠しているというその本性を表す。FAUVELは、Flaterie（へつらい）、Avarice（貪欲）、Vilanie（野卑）、Variété（気まぐれ）、Envie（妬み）、Lascheté（卑怯）の頭文字からなる<sup>2</sup>。今は、聖職者も俗人もフォヴェールにおべっかを使う。教会については、教皇からはじまり、司教、教会参事会会員、司祭以下の在俗聖職者、托鉢修道士、さらには、フィリップ4世時代に取り壊されてしまったテンプル騎士団修道士がフォヴェールに支配されていると言う。また、世俗においても、諸侯から庶民まであらゆる身分の人びとがそうになっているということが述べられる。そのせいで、本来低い身分にとどまるはずの卑しい人物が高い地位についている。このような状況は、反キリストの到来を予告するものであるから、人びとは俗世の名誉よりも神の栄光に心を向けるべきである。以上のようなメッセージの連続が、『フォヴェール物語』第一部を構成している。背景には、フィリップ4世の統治下に行われた官僚制度の整備に対する貴族の反発、ア

<sup>1</sup> *Le Roman de Fauvel*, éd. Armand Strubel, Le Livre de poche (Lettres gothiques), 2012, vv. 175-222.

<sup>2</sup> *Ibid.*, vv. 237-252.

ヴィニョン捕囚以降の俗権による教会の権利への侵害があると言われている。テンプル騎士団の解体についても、彼らが悪徳にまみれていたという文脈で触れられている。

このフォヴェールが大胆にも運命の女神に求婚をして、斥けられるというのが 1314 年に成立したとされる第二部の内容である。今や世界を支配したフォヴェールが臣下の賛同を得て、フォルトゥーナに求婚をするべくその住処のマクロコスモスに行くが、彼女は、自分は知恵と同様に神の娘であり、お前などを相手にするはずはないと言って拒み、代わりに侍女の「虚しい栄光」(Vaine Gloire) との結婚を提案する。フォヴェールは「虚しい栄光」との間に無数の子を作り、それらが世界を席卷するにいたる。フォルトゥーナのディスクールは、旧訳聖書やボエチウスの例を持ち出したり、運命と人間の自由意志の問題について言及したり、ジルベール・ド・ラ・ポレの『六要素』に言及したりしている。第二部の終わりには、この作品の作者がジェルヴェ・デュ・ピュスという名前であるということが、記されている。便宜的に第一部の作者も同一人物であるとする研究もあるが、その確たる証拠は何もない。本論では、第一部と第二部の性質が異なることを前提にして論じるという方法をとる。

さらに、フランス国立図書館 BnF. fr. 146 写本(ロンクフォールの校訂本<sup>3</sup>以来、E 写本と呼ばれる)では、シャイユー・ド・ペスタンと名乗る人物が第二部に大幅な加筆をしているものが収められている。第二部にもある、フォヴェールの嘆きと求愛の場面をおおいに膨らまし、また、「虚しい栄光」とフォヴェールの結婚に際して、美德と悪徳の寓意人物による騎馬槍試合と、新婚初夜において、二人の結婚に納得しない人びとによるシャリヴァリの場面を挿入している。さらに、第一部にも第二部にも、ラテン語や古フランス語の歌を楽譜と共に挿入しており、音楽史的にはアルス・ノーヴァに関する一級の資料になっている。

以上が、『フォヴェール物語』の内容と構成である<sup>4</sup>。以上の説明から垣間見られるように、この作品は、社会風刺、寓意文学の伝統、音楽史、フォークロアについての議論に開かれているが、本論では、動物が物語の主人公になっていることに注目して、『狐物語』およびその後継作がこの作品の成立

---

<sup>3</sup> Gervais du Bus, *Le Roman de Fauvel*, éd. Arthur Långfors, Firman Didot, 1914-1919 (SATF).

<sup>4</sup> 要約に際しては、細川哲士「ある怪物の正体：『フォヴェール物語』とは」『フランス文学』第 20 号、立教大学、223-237 頁を参照した。

に果たした役割について指摘をすることを目的とする。ここでいう影響のうち直接的なものは『フォヴェール物語』第一部に集まっているように見える。また、運命の女神フォルトゥーナが『新版ルナール』と『フォヴェール物語』の第一・二部に出てくることが、論を進めるにあたり問題になるが、これに関する作品間の影響関係についても、仮説を提示したい。

## 1. 『フォヴェール物語』と『新版ルナール』のフォーヴァン

本論冒頭にも記したように、第一部の冒頭には、フォヴェールの毛の色である *fauve* (黄褐色) やその名前が、この馬の性質を表しているという説明がある。これは、『薔薇物語』を代表とする13世紀以降の寓意文学の伝統に則ったものである。12世紀後半から13世紀中頃までに書かれたもとの『狐物語』とは、おおいに異なっているが、13世紀中頃以降に書かれた後継作(『フォヴェール物語』成立以前には、リュトブフの「ルナールの変容」、逸名作者による『ルナールの戴冠』、ジャックマール・ジェレの『新版ルナール』)には、寓意により人びとの悪を風刺するという手法が顕著に認められる。

寓意化は、もとの『狐物語』の中でも後期に属するとされる枝篇の中にすでに見出されるが<sup>5</sup>、後継作においてはこの傾向が顕著になり、ルナールは悪と偽善の象徴と化していく。ロンクフォルスによる校訂本の序文やストリュベルを始めとした諸研究が指摘しているように、直接的な影響として第一に注目すべきは、1289年にリールで成立した『新版ルナール』に登場するフォーヴァンという雌ラバである。

『新版ルナール』の第二部には、ルナールがノブロン王から愛人アージュを寝取ったことがきっかけで両者の間に起こった戦いが描かれている。ノブロンの子オルグイユ(傲慢)とプロセルピナの子に生まれたオルグイユ(傲慢な人)という寓意的な名前をもった人物が登場することや、ルナールの舟である「悪徳の舟」の舵取りとして、法王をはじめとした在俗聖職者や托鉢修道士が登場するということが、もとの『狐物語』にはない特徴に

---

<sup>5</sup> すなわち、第 XXIV 枝篇「ルナールの誕生」は、旧訳聖書の「創世記」の世界創造に想をえているが、ここにはルナールの性質の寓意的な説明(「[エヴァが杖をふると誕生した] その狐は手練手管に長けたルナールを意味する。その後、この術に長けた人びとはみなルナールと呼ばれている。」 *Icil goupil nos senefie / Renart, qui tant sot de mestrie. Touz ceus qui sont d'engen et art / sont mes tuit apelé Renart, « Les Enfances Renart », dans Le Roman de Renart, éd. N. Fukumoto, N. Harano et S. Suzuki, trad. G. Bianciotto, Le Livre de poche (Lettres gothiques), 2005, vv. 15-17*) が見られる。

なっている。戦いは、ルナールは戦況がよくなったところで和解をもちかけることにより、宮廷に復活するだけでなく権力を握るというものであるが、この和解の場面で登場するのが、ギール（悪巧み）夫人<sup>6</sup>と、彼女が乗る雌ラバのフォーヴェンである。

これが作品中で最初に紹介される際には、その毛皮の色を指す「フォーヴ（Fauve）」とギール夫人に呼ばれていたとある<sup>7</sup>。これは、現代フランス語では黄褐色を意味するが、『新版ルナール』では、それに先だって、「白でも、灰色でも、青でも、青緑でもなくて、あまりにも多くの色を持っている *Blanche, bise, bleue ne perse / Ne fu, mais trop estoit diverse*<sup>8</sup>」という説明がなされている。中世の色彩感覚において、色を混ぜることはタブーになっており、ミ・パルティの服が道化、縞模様が娼婦や罪人の標章になっていたことが知られている。ユダや狐の毛色の色である *roux*（赤褐色）もまた、赤と黄の混合とされている<sup>9</sup>。*fauve* を巡る上記の説明も、この文脈で理解されるべきであろう。この登場人物についてはさらに、「不誠実な考え (*fausse pensee*) の蹄鉄をしているが、最近あらたに嘘と偽誓の蹄鉄をした。欺瞞の鞍を敷いている。これらは、まさにエダンの街<sup>10</sup>で新たにみつらえられたものだ。誤った判決 (*faus jugement*) からなる純金の腹帯をしていて、これに頼るものは誤っている (*faus*)。そのせいでひどい仕打ちをうけることだろう<sup>11</sup>。」という説明がある。フォーヴという名前が、「偽り、間違い、不誠実」を意味する *faus* に結びついていると理解されていることが読み取れる。

以上のことは、本論の冒頭に紹介した『フォヴェール物語』が冒頭で主人公の毛皮の色を何色でもない色とし、その名前の由来を *FAUS*（偽りの）と *VEL*（覆い）からなると説明していることに完全に一致している。ギール夫

---

<sup>6</sup> 交渉を仕切って、和平をなしとげ、王やその臣下たちの許しをとりつけたギール夫人の外套は寓意的な紋章を冠していて、「『へつらい』と『嘘』に分割され、『からかい』の刺繍がなされており、また、『約束すれど与えず』の縁取りがされている」*Ele avoit son mantel parti / De losenges contre mençoingnes, / Bordé d'un aufrisel d'antroingnes, / Et de premettre sans donner / L'avoit fait a pourfil fourrer* (Jacquemart Gielee, *Renart le nouvel*, éd. Henri Roussel, Picard, 1961, vv. 6518-6522) と説明されている。これは、『フォヴェール物語』の BnF. fr. 146 写本への加筆部分にも影響を与えた『反キリストの騎馬槍試合』（1322年頃）の影響であろう。

<sup>7</sup> Jacquemart Gielee, *op. cit.*, v. 6544.

<sup>8</sup> *Ibid.*, vv. 6529 et sq.

<sup>9</sup> たとえば、ミシェル・パストゥロー『ヨーロッパ中世象徴史』篠田勝英訳、白水社、2008、193-206頁（第9章「赤毛の男—中世におけるユダの図像学」）。

<sup>10</sup> ルセルによる校訂本の固有名詞一覧に、エダンはパ・ド・カレの町で、住人は不実だという評判があったという説明がある (Jacquemart Gielee, *op. cit.*, p. 329)。

<sup>11</sup> Jacquemart Gielee, *op. cit.*, vv. 6531-6541.

人とフォーヴは、「悪徳の舟」の舵取りをしていたことへの報酬としてルナールから、羨望 (Convoitise)、貪欲 (Avarisse)、吝嗇 (Escarcteté)、オルグイユと共に、在俗聖職者たちに与えられるが<sup>12</sup>、このことも、本論冒頭で紹介した『フォヴェール物語』冒頭で、フォヴェールの名は悪徳の頭文字からなると説明されていることを思い起こさせる。

また、『ルナールの戴冠』と『新版ルナール』は、ライオンのノーブル王（『新版ルナール』ではノブロン王）の臣下だったルナールが、この世の聖と俗のあらゆる身分の人びとのところに入り込み、この世の頂点に立つという内容を持つが、『フォヴェール物語』第一部のフォヴェールはこの状態をすでに達成している。また、これは後で節を設けて論じることであるが、『フォヴェール物語』第二部におけるフォヴェールのフォルトゥーナへの求愛とその失敗は、『新版ルナール』の結末を発展させたものであるととらえることができる。

『フォヴェール物語』への『新版ルナール』の影響について最も積極的に論じているのは、『フォヴェール物語』の校訂者ロンクフォルスである<sup>13</sup>。上に示したようなフォーヴァンとフォヴェールの類似性の他に、『新版ルナール』の第二部の冒頭で、ルナールが世界の二つの部分、すなわち俗人と聖職者を支配している<sup>14</sup>と述べているところに注目して、そのことは『フォヴェール物語』の第一部が繰り返し述べており、作品の構造そのものになっているとする。さらに、両者に説教から借りてきたと思われる同様の表現が見られることも指摘している。たとえば、たとえ王であれ人は誰もがアダムとイヴの子孫で、泥や汚穢からできているのだから、常に死を思い、傲慢に陥ることを避けなければならないと、話者が聴衆に対して述べる箇所がこれらの作品には共通して存在する<sup>15</sup>。

『新版ルナール』の校訂者ルセルは、このような作品の構造や表現は当時のラテン語とフランス語の社会風刺において使われる定型的なものであって、両者の直接的な影響関係を示すものではないと言う<sup>16</sup>。しかし、偽善の象徴

---

<sup>12</sup> *Ibid.*, vv. 7129-7254.

<sup>13</sup> Arthur Långfors, « Introduction », dans Gervais du Bus, *op. cit.*, pp. VXXXVI-XCV. この見方は、後述のように、『新版ルナール』の校訂者ルセルにより批判されているが、フリンは影響は否定できないとしている (John Flinn, *Le Roman de Renart dans la littérature française et dans les littératures étrangères au Moyen Âge*, Toronto : University of Toronto Press, 1963, pp. 481-483)。

<sup>14</sup> Jacquemart Gielee, *op. cit.*, vv. 2936 et sq.

<sup>15</sup> *Ibid.*, vv. 5821-5835 ; *Le Roman de Fauvel*, éd. Armand Strubel, *op. cit.*, vv. 1113-1124.

<sup>16</sup> Henri Roussel, *Renart le Nouvel de Jacquemart Gielee. Étude littéraire*, Lille : Presse

となっている動物を主人公とする物語で、フォーヴやフォルトゥーナが共通して描かれていることを考えれば、直接的な影響関係がないと言い切るのはむしろ難しいのではないだろうか。ルセルの言うような風刺の伝統の上に乗って、作品の精神や登場人物のあり方を『新版ルナール』に学んだのが『フォヴェール物語』であるというのが筆者の考えである。

## 2. 『フォヴェール物語』とリュトブフの「ルナールの変容」

以上に、『新版ルナール』が、『フォヴェール物語』の形成に影響を与えている可能性を指摘した。以下には、『フォヴェール物語』第一部の一節を『狐物語』の後継作としては始めに書かれたリュトブフの「ルナールの変容」（1261年頃）と比較しながら分析することで、ルナールとフォヴェールの人物像の重なりと違いを論じ、これらのテキストの影響関係について指摘することにしたい。

さきに『フォヴェール物語』第一部の冒頭には、フォヴェールの性質が、固有名詞の分析によって寓意的に語られていると述べたが、その直後には以下のような箇所がある。

彼は、よい飼い葉桶にありつくために  
行ったり来たりしているだけだ。  
人の気に入るように心血を注ぎ、  
べてんと虚偽のために  
悪知恵のすべてを注ぎきっている。  
あちこち行ったり来たりするので、  
決して馬術や手綱によって  
押さえられたり、止められたりしないだろう。  
そこかしこを突進し、走り、ギャロップする。  
偶然にまかせて、考えなしに進み、  
いつでも支配をしている。  
出世をするために、  
へつらいの術に心血を注ぐ。  
まがい物を磨き、  
真実を隠し、正義を妨げられるようにと。

---

universitaire de Lille, 1984, pp. 203-207.たとえば、悪徳が俗人と聖職者の両方を支配しているということは、リュトブフの「世界のありさま」（Rutebeuf, «De l'estat du monde», in id., *Œuvres complètes*, éd. Michel Zink, coll. «Le livre de poche» - Classique Garnier (Lettres gothiques), 2001, pp. 82-93) の作品構造そのものになっている。

(『フォヴェール物語』<sup>17</sup> vv. 286-300)

Il ne fet qu'aler et venir.  
Pour avoir bonne menjoere ;  
Moult s'estudie qu'il puist plere ;  
En barat et en fauseté  
A son engin dou tout jeté.  
Il est tant alé et venu  
Que ja mes ne sera tenu  
N'aresté par frein ne par bride.  
Il point par tout e court et ride,  
Par fortune va sanz reson  
Et si regne en toute saison ;  
Pour soi haucier momut s'estudie  
Ou dotrinal de flaterie,  
Si que faus puisse bien polir,  
Vérité taire et droit tolr.

登場人物ぺてん (barat) と虚偽 (fauseté) に悪知恵 (engin) を注ぐというのも、出世をするためにへつらいの術に心血を注ぐというのも、まがいものを磨き、真実を隠す、正義を妨げるというのも、まさにもとの『狐物語』が育て上げてきたルナールの像に重なる。『狐物語』およびその後継作のルナールと『フォヴェール物語』のフォヴェールに共通する性質である。さらにここには、フォヴェールがそこかしこを突進すると述べられているが、ここではこのことに注目したい。リュトブフの「ルナールの変容」(1261年成立)の冒頭で、ルナールが現世を走りまわって悪徳を広めると言われていることを思い出させずにはおかないからである。

ルナールは死んだ。ルナールは生きている。

ルナールは汚い。ルナールは卑しい。

ルナールは支配する！

ルナールは、王国を支配する。

手綱を緩めて、馬を走らせる。

首を伸ばして。

(「ルナールの変容」<sup>18</sup> vv. 1-6)

---

<sup>17</sup> *Le Roman de Fauvel*, éd. Armand Strubel, *op. cit.* 以後、『フォヴェール物語』からの引用は、この対訳本による。

<sup>18</sup> Rutebeuf, « Renart le bestourmé », *Œuvres complètes de Rutebeuf*, éd. E. Faral et J. Bastin, Picard, 2 vols, 1959-1960, pp. 532-544.

Renars est mors : Renars est vis !  
Renart est ors, Renars est vils :  
Et Renars regne !  
Renars a moult regné el regne ;  
Bien i chevauche a lasche regne,  
Col estendu.

その一方で、「ルナールの変容」の 5-6 行目の「手綱を緩めて、馬を走らせる。／首を伸ばして」に認められる動物相と人間相のゆらぎ —— ルナールは人間のように馬に乗っているのか、それとも、狐の姿で首を前に伸ばして四足で走っているのか？ —— は、もともとの『狐物語』に多用され、作品に精彩を与えていたものであるが、ルナールが偽善の象徴となり寓意物語化された 13 世紀後半以降の『狐物語』の後継作においては徐々に少なくなり、『フォヴェール物語』ではほとんどなくなってしまふ。フォヴェールが寓意人物として、一貫して抽象的なモードで描かれるこの物語の第一部では、人びとが「なでさする」(torchier) ことで馬のご機嫌とりをしているということ以外では、フォヴェールについての説明はすべて寓意的なものであり、その行動や言葉が具体的に語られることはない。また、第二部と、それへの E 写本におけるシャイユー・ド・ペスタンの加筆部分でのフォヴェールは、運命の女神に求愛する狂った男として一貫して人間相で描かれている。ここに引用した描写は、比喩とはいえ、フォヴェールが動物相で描かれているこの作品では珍しい場面である。

それは、この箇所が人々は神ではなく、フォヴェールを崇拝することで動物のようになっているという、この物語の根本的な主張を伝える箇所の前置きとして書かれているからだ。「フォヴェールが動物の王であり、人間の王が人間であるというのが道理 (raison) というものである。ところが、神の似姿に作られた人間は世界の王であるはずなのに、フォヴェールを王として、動物たちと同様に下を向いて自分たちの土地を求めている。そのような人びとは、動物と同様のやり方で心をこの世につないでいるのだから、動物だといわなくてはならない。これは世界の終わりを予想させるものだ<sup>19</sup>。」と要約できるディスクールが後に続く。そこには、*beste* (動物)<sup>20</sup>、*bestiauté* (動

---

<sup>19</sup> *Le Roman de Fauvel*, éd. Armand Strubel, *op. cit.* vv. 259-362 の要約。

<sup>20</sup> « Car les hommes sont devenus beste » 「なぜなら人びとは動物になってしまったから」(*Ibid.*, v. 335) など。



物性)<sup>21</sup> という語が繰り返されるが、そのような中で、第 333-334 行「神が準備したものは完全にひっくり返されてしまった」(Mes or est dou tout bestourné / Ce que Diex avoit atorné) において bestorner という語が現れる。この語はここで比較対象としているリュトブフの「ルナールの変容<sup>22</sup>」(« Renart le bestorné ») の表題に出てくる語である。語源的には動物とは関係がないようだが<sup>23</sup>、言うまでもなく beste (動物) + torner (ひっくり返す) という分解が可能であり、「獣化させる」という響きをもつので、この文脈において現れることは腑に落ちるところである。この語は『フォヴェール物語』第一部の中で、その後 5 回繰り返されて現れる。ルイ 9 世の宮廷に入り込んだ托鉢修道士たちの偽善をルナールの仲間にととえて批判するリュトブフの「ルナールの変容」にみられる社会風刺は、冒頭に説明した『フォヴェール物語』の精神そのものだと言える以上、この語の繰り返し、「突進し、走り、ギャロップする」フォヴェールの像を描く箇所には置かれていることは、「ルナールの変容」への目配せと考えてよいのではないだろうか？

### 3. 『フォヴェール物語』第一部のフォヴェールとフォルトウーナ

一方、上に『フォヴェール物語』から引用した箇所は、『狐物語』やその後継作のルナールとフォヴェールの違いを読み取らせてくれる箇所でもある。すなわち、フォヴェールは、自分の欲望に忠実に、「偶然にまかせて、考えなしに行く」(Par fortune va sanz reson) とされているのに対して、『狐物語』のルナールがこの世を走り回ることには、家族のために餌を求めてという目的がある。フォヴェールに理性(raison)がなく、やっていることに理由(raison)がないことは、この一節の強調するところである。彼の臆な性質は、引用箇所に先立つところで以下のように強調されている。

<sup>21</sup> « Quant nous voions bestiauté / sus les hommes si haute assise » 「動物が人間のはるか上に君臨しているのを見ると」(Ibid., vv. 352 et sq.)

<sup>22</sup> bestorner は第一には「逆さまにする」という意味だが、筆者は、『狐物語』のいたずら狐が、リュトブフの作品で托鉢修道士になって現れることは変質ではあっても、逆さまになることではないと考え、トブラ=ロマチの古仏語辞典に示されている« verwandeln » 「姿を変える」の語釈をとり、「ルナールの変容」と訳している(Tobler-Lommatzsch, *Altfranzösisches Wörterbuch*, 1915-2008, t. 1, col. 953, l. 1)。

<sup>23</sup> W. von Wartburg, *Französisches Etymologisches Wörterbuch. Eine Darstellung des galloromanischen Sprachschatzes*, Bonn ; Heidelberg ; Leipzig-Berlin ; Basel, 1922-2002, t. 13-2, 69ab.

フォヴェールは理性的な動物ではない。  
うわべだけの存在であり一定しない。  
ごまかしに満ちていて、真実というものがなく、  
人びとを騙すための存在だ。  
(『フォヴェール物語』 vv. 259-262)

Fauvel [est] beste non resonnable,  
Chose apparent et non estable ;  
Plain de fallace, vuit de voir,  
Figure de pour gent decevoir.

『狐物語』からいったん離れて、このようなフォヴェールの性質について考察を進めることにしたい。フォヴェールが、善悪の判断によってではなく、自分をなでさすってくれる人を栄達させるものとして描かれていることは上で述べた通りであるが、ここには、そのやり方は一定していないことが書かれている。定見を持たず、もちあげたかと思えば、また突き落とす。これは、フォルトゥーナがもつとされてきた本質的な性格である。BnF. fr. 146 写本で、上記の引用と同じ葉 (3v) には、『カルミナ・ブラーナ』にも収められているフォルトゥーナに関するラテン語詩が置かれている。

おお、変わりやすく  
不確かなフォルトゥーナよ  
疑わしい  
裁き手たちの席を設ける者よ  
(『フォヴェール物語』、p. 162)

O varium  
Fortune lubricum,  
Dans dubium  
Tribunal iudicum,

フォルトゥーナは、プロローグでも、フォヴェールをこの世の王にした張本人として描かれている<sup>24</sup>。また、さきほどまで高みにいた者を下に落とし、下にいた者を高みに持ち上げるという回転を止めることはないとして述べられている<sup>25</sup>。さらに、BnF. fr. 146 写本に収められた『フォヴェール物語』の冒頭に描かれている細密画では、フォルトゥーナがフォヴェールを画面下に描かれた小さな馬小屋から、画面上にある大きな馬小屋へと、上下の場面を繋ぐ

<sup>24</sup> *Le Roman de Fauvel*, éd. Armand Strubel, *op. cit.*, vv. 23-27.

<sup>25</sup> *Ibid.*, vv. 79-86.

階段を通過してひきあげようとする様子が描かれている。これは、あたかも、第二部と **BnF. fr. 146** 写本の加筆部分で、フォヴェールの求愛を手ひどくはねつけるフォルトゥーナを予見しているように見える。作品全体の構造を知る写本制作者がさきに引用したラテン語詩を挿入していることには、天上界の法則を知らないでこの世を支配しているつもりになっているフォヴェールに対する揶揄があるのだろう。

しかし、第一部の本文においてフォルトゥーナは、フォヴェールの援助者としてひきあいに出されているに過ぎないことを以下に指摘したい。第一部で、本来、世俗の権威の上にたつべき教会の権威が失墜していることが嘆かれる場面——フィリップ4世時代の、アヴィニヨン捕囚や、教会に対する徴税権の設置が問題になっているとされている——では、その責任はフォルトゥーナではなく、フォヴェールにあるとされている。

不正でくだらない<sup>26</sup>フォヴェールが、  
このごった煮のすべてをかき回したのだ。  
彼は望むようにフォルトゥーナの向きを変えて  
神が作ったものを逆さまにする。

(『フォヴェール物語』vv. 395-398)

Fauvel qui est faus et quassé  
Tout ce broet li a brassé :  
Si comme il veut Fortune tourne  
Et ce que Diex a fait bestorne.

また、

しかし、フォヴェールが悪さをして  
自分の荷車をひきまわしたので、  
フェラン（葦毛）やモレル（黒毛）の気には入らないが  
本来、低いところにある月であるはずの  
地上の領主権が  
フォルトゥーナの輪によって  
主権を持つ聖なる教会の上に立つことになった。  
教会は下に立ったせいで、

---

<sup>26</sup> 「くだらない」の原語は *cassé*。ロンクフォルス校訂本の語彙集には「取り入るのがうまい (*insinuant*) 」という語釈がある。Takeshi Matsumura, *Dictionnaire du français médiéval*, Les Belles lettres, 2015 もロンクフォルス版を引用してこの訳を採用している (p. 507)。

弱々しい光りをなんとか放つに過ぎない。

(『フォヴェール物語』 vv. 467-475)

Mais Fauvel a tant fauvelé  
Et son chariot roolé  
Que, malgré Ferrant et Morel,  
La seigneurie temporel,  
Qui deüst estre basse lune,  
Est par la roe de Fortune  
Sus sainte Eglise souverainne ;  
L'Eglise est dessouz si qu'a painne  
Puet donner pou de sa lumiere.

神は教会を太陽として、世俗の権威を月として作ったが、それがフォヴェールのせいで逆さまになってしまったと嘆かされている。これらの箇所では、あたかもフォルトゥーナはフォヴェールの共犯者として描かれており、あたかも、フォヴェールの意志にそって車輪を回しているかのように描かれている。

第一部においてフォルトゥーナが言及される箇所は、以上の二箇所のみである。プロローグと、その他の二箇所とでは、フォヴェールとフォルトゥーナの力関係が異なっていることが理解される。ここに、第一部のプロローグと、本文のフォルトゥーナの扱いを巡る齟齬も、第一部と第二部の作者が異なることによるのではないかという推測が成り立つ。すなわち、フォルトゥーナとフォヴェールの対話を主題とする第二部が書かれた後で、その影響を受けて第一部のプロローグが付け足された。第二部への大幅な加筆を含む BnF. fr. 146 写本は、第二部におけるフォルトゥーナとフォヴェールとの関係を念頭に第一部にもフォルトゥーナの細密画と、女神に関するラテン詩を挿入したという推測が成り立つのである。

#### 4. 『新版ルナール』のフォルトゥーナと『フォヴェール物語』

ロンクフォルスは校訂本の序文において、『フォヴェール物語』でフォルトゥーナが登場することの背景には、『新版ルナール』の結末において彼女が登場し、ルナールに運命の車輪の頂上に登るように提案する場面の影響があると述べている<sup>27</sup>。その場面の内容は以下の通りである。ルナールは、運命の車輪の性質を理解しているので車輪の上に乗ることを拒否するが、フォ

---

<sup>27</sup> Arthur Långfors, « Introduction », dans Gervais du Bus, *op. cit.*, pp. XCVIII-XCV.

ルトゥーナは車輪に棒を突っ込んで回転を止めておくからと述べる。ルナールが車輪に登ると、その右には「傲慢」(Orgueil)と「悪巧み」(Guile)が座し、車輪の下にはルナールが打ち倒した「誠実」(Foi)と、「欺瞞」(Fausseté)が倒した「忠実」(Loyauté)が転がっている<sup>28</sup>。各写本の末尾には、この様子の細密画が描かれている。

ところが、『新版ルナール』の校訂者でもあるルセルは、影響関係を云々することは早計であると述べている。ルセルがあげた理由として一番重要と考えられるのは、『フォヴェール物語』におけるフォルトゥーナは、神の摂理の実行者として描かれているのに対して、『新版ルナール』のフォルトゥーナは、気まぐれな異教の女神に留まるからというものである<sup>29</sup>。実際に、『新版ルナール』には、神の助けがなければルナールの栄光は続くので、悔い改めて神に仕えようというメッセージが書かれている。女神は神の意志の実行者ではないのである。

女神の性質の違いについて、トニー・ハントの論考を参照に補足的な説明をしよう<sup>30</sup>。ハントによれば、13世紀末までのフランス語、ラテン語の文学作品に出てくるフォルトゥーナにはボエチウスの『哲学の慰め』の影響が認められるが、アウグスティヌスがフォルトゥーナの存在を否定したことをうけて、中世人はボエチウスが提示する女神の二つの顔のうち片方を無視してしまっているという。すなわち、『哲学の慰め』の第二巻、散文二に出てくる盲目で定見のない女神のイメージが繰り返して表現される一方で、現世の栄光を軽蔑せよという教訓のみが語られており、第四巻に出てくる人智で把握できるものではない神の計画の実行者、摂理の実行者としての側面は隠されてしまっている。第五巻にでてくる摂理と人間の自由意思の関係については、たとえば『薔薇物語』においても、フォルトゥーナとは切り離されて「自然」のディスクールの中で論じられている。14世紀になってから、ダンテが『神曲』でフォルトゥーナを摂理の実行者として描くことで、女神のキリスト教化をなしとげたことは、ハワード・R・パッチをはじめとした論者により指

<sup>28</sup> Jacquemart Gielee, *op. cit.*, vv. 7667-7732.

<sup>29</sup> Henri Roussel, *Renart le Nouvel de Jacquemart Gielee. Étude littéraire, op. cit.*, pp. 206 et sq. また、ハワード・R・パッチも、中世のフランス文学におけるフォルトゥーナについて論じる論考の中で、『新版ルナール』のフォルトゥーナについて同様のことを述べている (Howard R. Patch, « Fortuna in old French literature », dans *Smith College Studies in Modern Languages*, vol. IV, n° 4, 1923, pp. 4 et sq.)。

<sup>30</sup> Tony Hunt, « The Christianization of Fortune », *Nottingham French Studies*, n° 38 (1999), pp. 96-113.

摘されているが、『フォヴェール物語』のフォルトゥーナのことがなぜか忘れられているというのがハントの指摘である。

我々が上に述べたことと照らし合わせると、第一部のフォルトゥーナのことであれば、ルセルの批判はあたらない。フォヴェールの補助者であるフォルトゥーナは、きまぐれな異教の女神であり、ルセルが言うように『新版ルナル』のフォルトゥーナが異教の女神であったとしても、それと同じということになる。とはいえ、第一部本文でのフォルトゥーナの登場は、上にあげた2箇所にも留まるのだから、影響関係を云々することは難しいだろう。

その一方で、『新版ルナル』のフォルトゥーナは、『フォヴェール物語』第二部の構成に着想を与えた、というのが筆者の見立てである。女神が自分を栄達させるのは、自分に惚れているからに違いないと勘違いをしたフォヴェールが、結婚をすることで車輪を自由に操ろうとして失敗するというのが第二部の大筋であるが、以下の引用は、フォヴェールが第二部冒頭の諸侯会議で自分の計画について述べている箇所である。これにストリュベルがつけている注釈を糸口に、『新版ルナル』の影響について検討していこう。

それに私は考えたのだ。  
すべてを分配するフォルトゥーナが  
私を愛してくれていないはずがない。  
これほどの名誉を私に注いでくれるのだから。  
彼女が私をこんなに大きな領主にしてくれた以上、  
彼女が私に偽りなく  
愛情と厚意を捧げてくれないなどということが  
あろうはずがない。  
彼女は結婚をしていないし、  
彼女を欲している私もそうだ。  
私は思うのだ。誰かが彼女に話しをしてくれれば、  
彼女はすぐさま賛同してくれるだろう。  
もし私が彼女を妻にすれば、  
彼女の車輪の主人ということになる。  
あの方は、私の支配下にいるので、  
私の好きなように車輪をまわしてくれるだろう。  
そうなれば、私の幸運は揺るぎない。  
安心して眠ることができるだろう。」

(『フォヴェール物語』 vv. 1784-1801)

Or ai je pensé d'autre part  
Que Fortune qui tout depart,

Il ne puet estre qu'el ne m'aimme  
Quant si grans honneurs en moi seme,  
Puis qu'ele m'a fait si grant maistre,  
Qu'elle ne m'ait sanz fallace  
Donnee s'amour et sa grace,  
Et elle n'est pas mariee,  
Ne moi aussi, qui li a li bee ;  
Et croi, qui li em parleroit,  
Que moult toust s'I acorderoit.  
Et se j'espousee l'avoie :  
De sa roe mestre seroie :  
La dame en mo danger seroit,  
Tout a mon plaisir tourneroit ;  
Lors seroie de bon eür  
Et me dormiroie a seür.

ストリュベルの注釈とは、「フォヴェールは、ジャックマール・ジェレの『新版ルナル』でルナルが実現した快挙を超えることを夢みている<sup>31</sup>」という短いもので、控えめではあるが示唆的である。『新版ルナル』の結末で、フォルトゥーナがルナルのために運命の輪の回転を止めていること自体にこの女神には例外的な好意が認められるが、フォヴェールは、ルナルのように一時的に回転を止めるのではなく、運命の女神を従えて、思うがままに回転をさせようとしているというのだ。

第二部の作者は、おそらくフォヴェールとルナルと競わせるのと同時に、自身が第一部の作者と作品の構想において競争をしている。前節で、『フォヴェール物語』第一部では、プロローグをのぞいてフォルトゥーナは、彼女と同様に臍な存在であるフォヴェールの援助者のように描かれていることを指摘した。第二部の作者、ジェルヴェ・デュ・ビュスは、それを第一部の作者を始めとする現世の人びととフォヴェールの勘違いによるものと解釈したのではないだろうか？ フォヴェールが人間界であるマイクロコスモスにおいてもった、フォルトゥーナがあたかも自分と同類であるというようなうぬぼれが、女神が住むマクロコスモスに行くことにより明らかになるという第二部の構成は、おそらくはこのような解釈から生まれたものだろう。フォルトゥーナは自分に惚れているのだから、自分は運命の車輪の回転を制御できるはずだと考えるフォヴェールと、自分は車輪の頂上に登りたくないと言った

---

<sup>31</sup> *Le Roman de Fauvel*, éd. Armand Strubel, *op.cit.*, p. 321.

ルナールとの競争の結果がどうなるかは始めから明らかである。第二部のフォルトゥーナの長口上により、フォヴェールと、フォヴェールにすぎる人びとの愚かさが徹底的に明らかにされる。

以上の考察により、『狐物語』の後継作である「ルナールの変容」や『新版ルナール』は、登場人物や作品の構想において、『フォヴェール物語』の第一部と第二部に影響を与えているものと推測できる。『新版ルナール』の最後に登場するフォルトゥーナは、第二部の中心人物となる<sup>32</sup>。しかし、ここで彼女についてこれ以上深入りすることは、この論考の主題であるルナールとの関係から私たちを遠ざけてしまうだろう。フォルトゥーナについては、本論で知ることとなった彼女の第一部と第二部との性質の違いについて考慮しながら引き続き検討をしていきたいと考えている。

---

<sup>32</sup> 『フォヴェール物語』におけるフォルトゥーナについては、Jean-Claude Mühlethaler, « Discours du narrateur, discours de Fortune : les enjeux d'un changement de point de vue », *Fauvel Studies*, éd. M. Bent et A. Wathey, Oxford : Oxford University Press, 1998, pp. 337-351 や、上に紹介したハントの論考が第二部を中心に論じている。